

追悼 芳賀徹先生

美術評論家としての芳賀徹

——最後の電話でのやり取りから——

稲賀 繁美

『藝術心理学』Psychologie de l'art（一九四七—一九四九年）の総題をもつアンドレ・マルロー André Malraux（一九〇一—一九七六年）の三巻の著作は、日本語訳〈東西美術論〉の第一巻がマルロー著／小松清譯『空想の美術館』（新潮社、一九五七年六月）と題され、第二巻『藝術的創造』が一九五七年十一月に、第三巻『絶對の貨幣』が一九五八年四月に同じ訳者で同書肆から刊行される。小松清（一九〇一—一九六二年）翻訳のこの著作は、それに先立ち月刊誌『藝術新潮』誌上に連載されていた。その同じ月刊誌の第九卷二号（一九五八年二月）には、ジョルジュ・デュテュイ「空想の美術館」は意味がない——マルローに反駁す」（二七八—二九五頁）と題する挑発的な記事が掲載された。第二巻と第三巻とのあいだの時期にあたる。自社の出版物の広告になるところか、かえって逆効果になりかねない記事は、どうして掲載されたのか。翻訳者は芳賀徹。どんな事情だったのか、二〇一九年の十一月末に深夜の電話で伺ってみた。だがさすがに六十年以上も前のこととして「いやア、覚えてないよ」とのお答えだっ

た。辣腕編集長だった山崎省三（一九二八—二〇〇六年）が、挑発したほうが効果的、と考えての判断だったのかな？とも。

いずれにせよ、この翻訳には恐れ入った。舌を巻いた、といつてよい。デュテュイ Georges Duthuit（一八九一—一九七三年）の文章は、現在の学術的なフランス語からみると破格というに近く、岳父であるアンリ・マティス Henri Matisse（一八六九—一九五四年）の文章に比べても、とても一筋縄にはゆかぬ難物である。それを芳賀徹は見事に訳しおおせている。デュテュイのマルロー論駁の著（空想を超えた）というより『ありえない美術館』Le Musée *inimaginable*: essai (3 vols, Paris: José Corti, 1956) の最終章「人はシナ人たりうるか？」を適宜要約した再構成である。

「よくこんなもの訳せましたね」と問うたところ、知られざる回想が顔を出した。デュテュイの目にはマルローは野蛮人で、大嫌いだっただけという。パリ留学で目をかけられ、親しくなつた芳賀徹は、戦前に中国美術についての著作も為したデュテュイへの共感が急速に強まっていたのだという。「デュテュイのことなら、君のほうが詳しいだろう」などと煽てられたが、滅相もない。「ボクはもちろん反マルロー派」で、小松清などとも付き合いはなかったという。

この著書でデュテュイは日本の茶室に言及している。どうやらこれは彼が芳賀に依頼してフランスの美術雑誌に掲載させた日本の禅寺の庭に関する記事に由来するらしい。というのもデュテュイは実際の茶室のことなど知らなかったからだ。『比較文学研究』第六十三号（一九九三年六月）巻末の著作目録（二七一頁）には「Jardins monastiques au Japon」が *Connaissance de*

ンフォルメル（「講座現代芸術」Ⅶ「現代の芸術」、勁草書房、一九五九年一月、八三一—〇二頁）は、のち「別の藝術——アンフォルメルの誕生」として『藝術の国日本——画文交響』（角川学芸出版、二〇一〇年二月、四三〇—四九頁）に収録された。

ジョルジュ・デュテュイの思い出は電話口でずいぶん詳しく承ったのだが、携帯電話機を持ちながらメモを取るのはいさぐさで不如意。技術不足で録音もできなかったため、きちんとした記録が残っていない。ホアン・グリス Juan Gris（一八八七—一九二七年）のポワント・セッシュをもらつたとか、本も頂いたが、引越して今どこにあるか分からない。でも探せば私信もでてくるはずだとか、デュテュイの亡くなる直前のやり取りとか、よく記憶しておられるのには驚嘆した。デュテュイはボードレール Charles Baudelaire（一八二一—一八七〇年）が好きで、「秋の歌」「旅への誘い」「雪の国」など、暗唱でよく口にしていたという。なにしろ裕福だったから、晩年に脳溢血で倒れてパリ移送の折には、キャラベル機をエクス・アン・プロヴァンスから個人でチャーターし、病の身を託っていた *Hôtel de Roi René* に、芳賀家は一同でお見舞いに参上したのだという。

コプトやビザンツ美術を愛したデュテュイは、地中海趣味が濃厚で、ロマネスクは好みだったが、北方のゴシックは国粹主義と結びつくので嫌いだつたという。五〇年代パリで、地下鉄のソルフェリーノ駅に近 *café aux trois marionnettes* はデュテュイの書斎代り。芳賀氏はそこには頻繁に出入りしたそう。前掲『藝術新潮』に掲載の肖像写真（一九五頁）もその場での撮影らしく、背景にはカナダから到来したジャン・ポール・リオベ

monde (No. 11, août-septembre 1957) 掲載とあるが、残念ながら雑誌名を確認できない。この記事掲載にあたって、デュテュイは文章の校正にとどまらず、極東からの若い留学生にさまざまな便宜を図る傍ら、自分の知識の欠落を補うべく、芳賀を質問攻めにしたのだという。他方、芳賀青年側でも、それまで日本で父君の幸四郎への反撥から、さして深入りしていなかった中世日本美学が留学先でにわかに必要不可欠な知識となつた、という事情があつたものと推察される。

このあとアンフォルメルに接近し、その立役者ミッシェル・タビエ Michel Tapié（一九〇九—一九七七年）の肝煎りで出版された仏文共著『日本の連続性と前衛』*Continuité et avant-garde au Japon* (Torino: Edizioni d'arte Fratelli Pozzo, 1961) と題する画集が知られる。平川祐弘氏はこれをフィレンツェの書店の飾り窓で発見して、羨ましく思ったと証言している。吉原治良（一九〇五—一九七二年）の率いる「具体美術協会」の面々だけではなく、橋渡しを務めた今井俊満（一九二八—二〇〇二年）や堂本尚郎（一九二八—二〇一三年）、同時代にニューヨークにいた猪熊弦一郎（一九〇二—一九九三年）や草間彌生（一九二九年生）らの作品も掲載した著作であり、英訳も出版され、同時代の日本現代美術を欧米に知らしめたその貢献は侮れない。芳賀はそこに長大な論考を寄せているが、そこで展開される華嚴教学にかんする哲理は、父君・幸四郎の書斎にあつた末綱忽（すえつなご）『華嚴経の世界』（現代人の佛教・佛典春秋社、一九五七年三月）に負つたものだとの証言を得た。数学者でありながら華嚴教学を深めたこの学究の著作は、仏文執筆のうえでもおおいに裨益したこと。和文版「別の芸術——ア

ル Jean-Paul Riopelle（一九三二—二〇〇二年）の大作と思しき作品が、壁面宜しく掛かっている。毛むくじやらのジョルジュ・マチュー Georges Mathieu（一九二二—二〇一二年）は、来日しても浴衣をめちやくちやに羽織つて、派手な抽象書道ばりのパフォーマンスを演じて見せたが、美学的には結局カルテジアン（デカルト主義の思想家）でアカデミックな成金だった。それよりサム・フランシス Sam Francis（一九三三—一九九四年）のほうがはるかに面白かつた、などと深夜のおしゃべりは、いつもより忙しなく、だが際限なく続きそうだった。

『大原美術館紀要』第二号（二〇〇五年三月）に「一九五〇年代パリ——君と僕の青春」という破格の「対談録」があり、ホストの高階秀爾氏（一九三三年生）に加えて堂本尚郎も途中から乱入して盛り上がり、大原謙一郎氏（一九四〇年生）がこんな「自由自在」の「万華鏡」のような回顧談は前代未聞と呆れている。

帰国後の芳賀徹は『藝術新潮』第十巻八号（一九五九年八月）の「こんな美術批評家たち」と題する「特集」に「その一二つの世代を斬る」（二〇一—〇九頁）を寄せている。宗左近（一九二二—二〇〇六年）と生野幸吉（一九二四—一九九一年）も寄稿しており、当時新世代が、先行する戦前世代の美術批評の在り方に反旗を翻していた様子も彷彿とする。芳賀がタビエとともに日本に旋風を齎したといつてよいアンフォルメルについて、今泉篤男（一九〇二—一九八四年）、富永惣一（一九〇二—一九八〇年）、土方定一（一九〇四—一九八〇年）に岡本謙次郎（一九一九—二〇〇三年）が「アンフォルメル 本もの廣もの」と題する冷笑的座談を寄せていた（同誌第八巻十一號、一九五七年十一月、八九—一〇二頁）。同号に M・タビエ

の「アンフォルメル」の未来——十三の省察」(一〇三—一〇五頁)を訳載した芳賀徹には、これは看過できなかった。タビエの文章は一九五七年二月二十三日から三月十六日まで、パリのスタッドラー画廊で開催された今井俊満個展に寄せた「激情の明証」*Evidences paroxysmiques*の改訂版。画廊目録に添えられた日本語訳も芳賀の手になる。本駒込の芳賀の書斎には、この折の目録に手書きで訂正を入れた手沢本が残っている。芳賀の「二つの世代を斬る」は右に記した四名の著名な批評家の文体および批評方法への痛烈なる罵倒であり、芳賀自身の *explication de texte* の、新帰朝者ならではの過激な実践例としても目覚ましい。

またこのやり取りそのものを揶揄し、芳賀が担いだ今井俊満をタビエもろともこぎ下ろす瀬木慎一「アンフォルメルをめぐるスキヤンダル」(『藝術新潮』第九巻二号、一九五八年二月、五四—六六頁)も、芳賀の名に触れることなく「アンフォルメルは藝術運動ではない」(六五頁)と決めつける。瀬木は、後年に至るまで、その「乱雑な言葉遣い」も含め、芳賀にとつて許せない敵となる。

このあたりの人間関係を復元し、そのなかに若き美術批評家・芳賀徹の「過激」なる言動を位置づけなおす作業は、興味津々。五〇年代末の日仏文化交流史の一齣としても無視できない。後年の「具体」の世界的評判も、ここに発するのだから。それを芳賀徹の晩年に何度か試みた。放送大学『日本美術の近代とその外部』最終回、芳賀の書斎「曙紅齋」でのインタヴュー(二〇一七年八月十四日収録)もその試み。だが芳賀の滔々たる固有名詞の洪水に圧倒されて、所期の目的は果たせなかった。——舞台設定を準備し終えたところで、紙面が尽きた。幕開きはまた別の機会に。